


特別展評価シート(1/2)

施設名	大阪市立自然史博物館	展覧会名	みんなでつくる淀川大図鑑
-----	------------	------	--------------

実績・成果	目的	大阪市民にとってもっとも身近な川である淀川は、都市河川にありながら豊かな生物多様性を擁してきました。その一方で、近年の河川管理や開発、人間活動によって、その自然が脅かされるという懸念も起きています。このような淀川流域の自然環境の現状を捉えるために、自然史博物館では2007年から市民に呼びかけて「淀川水質調査グループ『プロジェクトY』」を結成し、流域の生物の分布や水質などを網羅的に調査してきました。本特別展ではその成果を基に、淀川水系にもまだ豊かな自然が残されている一方で、流域の環境には様々な変化が起き、中には危機的な状況もあるという問題を紹介します。この展示を通して、淀川の自然を私たちがどのように見守っていくべきかを提起していきます。			
	会期	平成22年7月24日～10月8日（9月21日から10月8日まで15日延長）		会期 (66) 日	
	主催	大阪市立自然史博物館・大阪市立自然史博物館友の会・淀川水系調査グループ「プロジェクトY」・特定非営利活動法人大阪自然史センター			
	共催・後援	国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所、環境省近畿地方環境事務所、大阪府教育委員会			
	協賛・助成	日本財団・日本生命財団・河川環境管理財団・花博記念協会			
	観覧料	大人500円、高大生300円	無料対象者	中学生以下および市内在住65歳以上	
	観覧者総数	10,109人	有料入場	2,759人 (27.3%)	
	作品件数	約4800点	うち、借用	(ほぼ全て館蔵品)	
	関連事業	(・展示解説 ・講演会 ・講座 ・ワークショップ ・現地見学) その他 ()			
	企画・実施	学芸課 主导者：石田惣（動物研究室） 共催：大阪自然史センター 連携：大阪歴史博物館・淀川河川事務所			
成果	市民参加の調査研究という画期的な取り組みを基礎にして、淀川という大阪にとって重要な自然を多面的に取り上げる展覧会が開催できた。その成果は、淀川に興味をもつ市民や研究者をはじめ、学習用の課題として高校などの学校関係者からの評価も高かった。				
補足事項	「中高生のための展示見学ワークシート」を作成して夏休みに先行して配布し、多くの高校生の来館促進ができた。また、猛暑の影響で夏休み期間中の来館者が少なく、会期を延長して小中学生の確保に努めた。				

特別展評価シート(2/2)

施設名	大阪市立自然史博物館	展覧会名	みんなでつくる淀川大図鑑
-----	------------	------	--------------

定量評価	有料入場者数		予算	外部資金	総事業費	観覧料収入	その他収入	収入合計	図録販売数
	目標	6,610人	5,939,500	29,850,000	35,789,500	2,636,000	1,000,000	3,636,000	1,000
実績	2,759人	5,386,065	29,850,000	35,236,065	906,550	284,000	1,190,550	284	
達成率	41.7%	90.7%	100.0%	98.5%	34.4%	28.4%	32.7%	28.4%	

定性評価	実績・伝統の継承と新たな魅力創出		評価点	改善点
			<ul style="list-style-type: none"> ・今日的なテーマである環境問題、生物多様性について、自然史博物館と市民の連携によるプロジェクト形式の調査とその成果を展示する展覧会は、自然史系博物館の運営方式として高く評価したい。今日的なテーマである環境問題、生物多様性について、自然史博物館と市民の連携によるプロジェクト形式の調査とその成果を展示する展覧会は、自然史系博物館の活動方法として高く評価したい。館が長年にわたって築きあげてきた市民との連携や活動への積極的参画の実績とともに、今後も全国の博物館のモデルになると考える。 ・調査研究の成果として、1万点を超える標本の獲得、展覧会図録の他にも数多くの論文等が公表されたことは大きな成果である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会を企画・実施する上での時間的な制約があったこともあり、展示物絞り込みと展示手法等（入場したくなるような導入部の仕掛けの設定、解説パネルの読みやすさ、映像の利用やボランティア解説の実施）に不十分な点が見受けられた。
定性評価	さまざまな来館者への対応		評価点	改善点
			<ul style="list-style-type: none"> ・中高生・大学生向けのワークシートを作成・配付したことが効果を発揮し、博物館への来館者が少ない層と言われる高校生の入館者が多かったことは評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入館者数が目標値を下回った（目標の約41.7%の達成度）のは、猛暑が大きな要因と思われるが、展覧会自体にも、観客へのメッセージがやや弱かったことが要因とも考えられる。入館者のほとんど（97%）が大阪府下の住民で、淀川流域からの入館者は極めて少なかった。展覧会のメッセージ性を強め、主たるターゲットに十分届く広報を行うことが必要である。また、ワークシートの効果を考えれば、小学生と親向けのものを用意することが望まれる。
定性評価	連携による総合力の発揮		評価点	改善点
			<ul style="list-style-type: none"> ・多数（200人以上）のプロジェクト参加者によって形成されたネットワークの力により多数の標本が蓄積され、博物館のコレクションになったことを高く評価する。また、調査の実施から展示資料の提供、データの提供など幅広い領域で、外部の機関・組織と連携・協力が円滑に実施できていることも評価したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪市博物館協会に所属する博物館等とは、連携の在り方を更に拡充・発展させることが望まれる（事業の共同企画、広報やチケットの販売、割引）。
定性評価	ニーズに即し効率的な事業展開		評価点	改善点
			<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会に先立つ調査研究と展覧会に、展覧会開催のための事業費とほぼ同額の外部資金を複数の提供者から獲得し、調査研究と展覧会を充実させたことは特に評価したい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入館者数と観覧料収入の目標達成度が極めて低かった（入場者10,109人の27.3%）、観覧料収入達成度41.7%）。目標の設定方法を確立し、適正な目標を設定し、設定した目標の達成に向けて、強い関心をもって取り組んでいくことを期待する。 ・展覧会図録は、紙媒体でなく電子記録（CD等）の形で提供すればもっと安価に提供できると思われる。多くの人に展示の概要をわかりやすく伝える部分とより専門的な情報を紙媒体と電子媒体で区分することも考えられる。これまでの方式にとらわれずに、今後、新しい方法を検討してほしい。

総評	評価点		改善点
			<ul style="list-style-type: none"> ・展覧会に先立つ調査研究から展示に至るまで幅広く、自然史博物館がこれまで構築してきた方法やネットワークが生かされ、博物館活動に市民が積極的に参画していることと外部からの支援を積極的に獲得しているなど志のある博物館運営は、日本の博物館のこれからの方向性を示しており、高く評価できる。 ・調査研究で得た成果を更に多くの人に還元するために、展示の技法や展示解説、展覧会広報を更に十分見直し、展示の面でも日本の博物館をリードする存在になることが期待される。外部の展示のプロフェッショナルの参加・協力を得て、展示技法、展示解説その他についてもノウハウを蓄積していくことが望まれる。 ・観客の獲得、博物館の認知度の向上には、展示広報を含む幅広い広報活動の充実が不可欠である。各博物館単位の努力と並行して、博物館協会としての広報戦略の確立が期待される。